

令和元年度福祉作文コンクール

最優秀賞「あいさつと思いやりの心を」

釜石市立平田小学校

六年 高橋 優

私は、児童会長として、執行部のみんなと朝のあいさつ運動を行っています。私の出番は月曜日と水曜日ですが、始業式や終業式など節目の日には執行部全員で行います。七時四十五分から八時までの十五分間児童昇降口に立ち、登校してくる小学生や先生方に「おはようございます。」と声をかけます。

あいさつ運動をして、学年が上がるにつれあいさつの声が小さくなるのが分かりました。おそらく高学年になると、はずかしさも大きくなるからだと思います。でも、下級生にお手本を示すためにも、それは改善できるように高学年にしっかりと呼びかけたいと思います。

平田小学校児童会で長く続けているあいさつ運動ですが、私は、あいさつ運動をする意味は二つあると思います。

一つは、あいさつ運動で学年関係なくあいさつを交わし合うことで、学校全体のコミュニケーションがよくなると思います。どうしても、学校での会話や遊びは同じ学年の人とすることが多いのですが、あいさつを交わし合う仲になれば、きつと遊びの仲間も増え、学校生活がより楽しくなると思います。

もう一つは、あいさつ運動を活発にすることで、みんなが進んであいさつをするようになると思います。そして、気持ちのよいあいさつを学校だけでなく、地域のみなさんにも届けてほしいです。小学生にあいさつされると、地域のみなさんもうれしいと思うし、そういう様子を見ると、きつと私たち小学生も気持ちよくなると思います。私たちの小学校生活を支えていただいている地域のみなさんと、もつと仲よくなりたいです。

去年、私が五年生の時に、こんなことがありました。

授業が終わったの帰り道、私は自宅近くの横断歩道で、車が通り過ぎるのを待っていました。すると、私の後ろに、二十代半ばの若い女の人が、何かを探して道に迷っているような様子で立っていました。初めて会った人でしたが、困っているようなので、私から、

「どうかしましたか。」

と声をかけました。すると、その女の人は、平田地区の、あるスーパーを探していると言いました。そのスーパーは現在地とは逆方向でした。私は、もうすぐ自分の家に着くところでしたが、そのスーパーまでつきそって案内するため、学校から来た道を引き返すことにしました。

歩きながら、いろんな話をしました。その女の人は九州の出身だということ、一人で日本全国を旅しているのだということ。スーパーまでの道のりはあつという間で、楽しいひとときを過ごしました。

スーパーに着くと、女の人は笑顔で何度もお礼を言ってくれました。私は、とてもいい気持ちで、もう一度、家への帰り道を歩き始めました。結局この日の帰り道は、いつもの倍以上歩いたことになったのですが、私の心は、晴れ晴れとした気持ちでいっぱいでした。

勇気を出して声をかけてよかったな。助けてあげてよかったな。そう思いました。今年、学校で、中休みにおにごっこをしていて転んだ一年生を、五年生が「だいじょうぶかな。」

と声をかけ、保健室に連れて行くところを見ました。また、金管バンドクラブの練習では、入部したばかりで、楽器の演奏の仕方が分からない五年男子に、六年女子が教えているところも見ました。学校でも思いやりのある行動が見られました。

小学生である私たちは、できることは小さいです。でも私は、みんなが進んであいさつを中心としたコミュニケーションをとり、進んで助け合えるような学校になってほしいと思います。そのために、まずは児童会長である自分が、あいさつと困っている人を思いやる行動を心がけていきたいと思います。

「こんにちは。」

わたし達が、グループホームに着くと、ホームに入所しているおばあさん方やそのご家族、ホームの職員のみなさんが笑顔でむかえてくれました。おばあさん方もとても元気そうで、安心しました。

わたしの通う栗林小学校では、毎年三年生と四年生がグループホームを訪問し、交流しています。わたしは二回目になります。今年は、少し早めの敬老会を行うことになりました。わたし達は、入所しているおばあさん方に喜んでもらおうと、メッセージカードを作ったり、どんな歌を歌うか話し合ったりと、準備をして行きました。

いよいよ、敬老会が始まりました。最初は歌の発表です。合しよう曲「スタートライン」と「ありがとうの手紙」の二曲を歌いました。心を込めて、笑顔で歌いました。おばあさん方は涙を流しながらきいてくれました。わたしは、喜んでくださっていることにとてもうれしくなり、「来てよかった」と強く思いました。

次は、クイズ大会です。おばあさん方の得意なことや以前していた仕事、好きなことなどについてわたしたちが質問して、おばあさん方に答えてもらいました。問題を出す時は、おばあさんの近くに行き、大きな声ではっきりと話すことを意識しました。おばあさん方は、笑顔で答えてくれたり、時には笑いもさそってくれたりして、本当に忘れられない楽しい時間となりました。

わたしは、グループホームのおばあさん方と交流をして、自分のひいおばあさんのことを思い出しました。小さかった時、たくさん遊んでわたしのことをかわいがってくれたと、家族から聞いています。

そのひいおばあさんは、今、しせつに入っています。今年の夏休みにいこといっしょに会いに行つて来ました。前より少し体が細くなっていて、あまり話ができなくなっていました。それに、わたしのことを忘れてしまっていました。わたしは悲しくなり、少し泣いてしまいました。

だからひいおばあさんには、また元気になって、少しでも思い出してほしいと思っています。今度会いに行った時には、たくさん話しかけたり、身の回りのお世話や肩もみなどをしたりしてあげたいと思います。

それから敬老会で、グループホームの方から将来の夢を聞かれました。その時は「バレーボール選手」と答えましたが、実はもう一つあります。おじいさんやおばあさんが入所している施設の介護職員になることです。わたしが小さい時にひいおばあさんやひいおじいさんにしてもらったことを、今度は、たくさんのおじいさんやおばあさんにしてあげたいと思います。そして、毎日健康で元気に生活できるように、生活のお手伝いをしてあげたいです。

グループホームでの交流を終えて学校へ戻る時、入所しているおばあさん方が、「また来てね。」

と、笑顔で手をふってくれました。わたし達が見えなくなるまで手をふってくれました。わたしは、その笑顔をいつまでも忘れないと思いました。そして、いつまでも元気で長生きしてほしいなと思いました。ひいおばあさんの笑顔もわたしは忘れません。

今回のグループホームでの交流を通して、身近な人や地域のおじいさん、おばあさんのために自分達ができることを考えて行動することの大切さを感じました。そしてわたしは、力になってあげたいとはつきり思うようになりました。自分から進んであいさつをしたり、困って大変そうなどころを見かけたりした時は、手助けしたいと思います。将来の夢に向けて、今できることから、進んで始めていきたいと思いました。

私は、最近気になったことがある。それは福祉についてだ。その福祉の中でも一番気になっているのは、障がい者を患っている方々への接し方だ。

なぜ気になったのかを初めに説明をしたいと思います。

障がいを患っている方々のことを気になりはじめたのは、一年くらい前だ。きっかけはインターネットの動画サイトで障がいを患っている方が視聴者に、手話を教えるという動画を配信していたことだ。私は、この動画を見て手話が分からない人にはとてもありがたいものだと思っていた。しかし、その動画のコメントらんを見たら、「誰も覚えないでしょ。」というコメントや、「この手話本当に合ってるの?。」などという配信者を傷つけるような言葉ばかりだった。私は、そのコメントを見て、配信者の方に失礼だということを知ってほしいと思った。なぜ人の気持ちも考えずこんなことができるのと思っていたら、ある書きこみを見つけた。それは「障がい者だから。」というコメントだ。私は、このコメントを見てから「障がい」ということだけで差別をされている方々に失礼ということを知ってほしいと思った。それから、「障がい」ということについて、深く考えるようになった。

私の学年では、小学一年の頃から年に一回交流している同級生がいる。ミキさんは、私たちと同じ学校に入るはずだった。なぜ入れなかったかというところ、ミキさんは生まれつき障がいを持っていたからだ。市の中心部にある、支援学校に通学している。障がいがあるからとはいえない。一度会うたびに、喜ぶ様子を見せてくれている。私たちが高学年になると、今度私たちがミキさんの通っている学校に行くことになった。最初は仲良くなれるか不安や心配でいっぱいだった。しかし、思っていたのとは逆に、その学校の人たち全員が私たちを、喜んで歓迎してくれた。

「こんにちは。入り口はこちらです。」と全員が優しく接してくれた。

このときから私は、障がい者と、私たちは全然変わらない同じ人間だと思うようになっていた。

その学校の人たちと運動とゲームを混ぜたような遊びをした。ボッチャというスポーツだ。ボッチャは、その学校の人たちと私たちが混ざりチームを作った。ゲーム中では、初対面にも関わらず、笑っていることが多く、「頑張れ。」「おしい。」「上手。」などと、励ましや、応援の声などが多かった。このことから、障がいということに偏見を持たず、その人自身の性格を重視することが必要なのだと思った。障がい者といっても私たちと全く同じ一人の尊重すべき人だ、と改めて思った。

今の人間社会では、偏見や差別が多いと思う。そういう、偏見を持っている人には、どんな人にも偏見を持たずに、内面を重視してほしい。

最後に、全ての人に考えてほしいことがある。障がいを患っている方は好きで生まれたわけではないということだ。だからといって障がい者に、「可哀想。」というのは違うと思う。一番は、同じ人として接することだと思う。今年もミキさんが私の学校に来て私たちと交流する。いつものように変わらない笑顔で、皆でいっしょに楽しみたいと思っている。

おじいちゃんの家には、地いきの人がしゅう会所のかぎをかりにたずねてきます。ぼくは、どうしておじいちゃんはしゅう会所のかん理をしているのだろうとふしぎに思いました。おじいちゃんに聞いてみると「ふくし」という言葉が出てきたので、言葉の意味を調べてみました。じてんには「多くの人びとのしあわせ。こうふく。」と書いてありました。ぼくは、しあわせのために何ができるのか考えてみました。

ぼくがいつも心がけているのは、あいさつをすることです。大きな声で、はっきりと地いきの人や先生にあいさつをしています。あいさつは大事だと思うからしています。

朝、学校へ行くときには「おはようございます。」と近所のおじいちゃんやおばあちゃんにあいさつをします。すると「いってらっしゃい。」とかえしてくれます。家ぞくではない人からも「いってらっしゃい。」と言われると、とてもうれしくなります。今日も元気にがんばろうと思います。帰りには「お帰りなさい。」と声をかけてくれます。その声を聞くとぼくは、心がほわっとあたたかくなります。今まであいさつは「大事」と思っていました。でも、あいさつをすることで、地いきの人からもぼくは元気をもらっているんだなと思いました。

ぼくのおじいちゃんは、町内会のふく会長をしています。おじいちゃんがしている仕事は、しゅう会所のかん理です。しゅう会所では、地くの人があつまって会ぎをします。地しんがあつたときは、ひなん所になります。おじいちゃんとおばあちゃんは、ひなんする人のために、早く行ってしゅう会所をかいほうします。地くのひなんくんれんもしています。だからおじいちゃんとおばあちゃんは、たくさんの人と知り合いです。

ぼくは「どうしてたいへんなのに地いきのことをしているんだろう。」と思い、おじいちゃんにたずねてみました。おじいちゃんは、こうこたえました。

「自分たちも地いきの人にたすけてもらったことがあるんだよ。だから今度は、自分たちも地いきの人のためにやっているんだよ。」

ときました。ぼくは、地いきの人のために仕事をしていることがすごいなと思いました。地いきの人がこまっている時には、おたがいにたすけ合うことが大事だと思います。それからおじいちゃんはこのことを教えてくれました。

「ふくしの『福』の漢字も『祉』の漢字も、『しあわせ』という意味だよ。だから『福祉』は、地いきの人といっしょにたすけ合いながらしあわせにくらすことだよ。」

ぼくは、今まで「しあわせ」について考えたことはありませんでした。ぼくは、何かをもらったり、おいしいものを食べたりしたときにしあわせと感じていました。家ぞくみんながなかよくして、楽しくすごしているからしあわせと感じていました。でも本当は、あいさつや地いきのためにしていることもしあわせにつながっていることに気がつきました。

ぼくは、ラグビーをしています。ラグビーのせいしんの中に「一人はみんなのために。みんなは一人のために。」という言葉があります。意味は「ふくし」と同じことだと思いました。

ぼくは地いきの人のために、これからも大きな声ではっきりと気持ちのよいあいさつをしようと思います。また、ごみが落ちていたらすすんでひろいたいと思います。こまっている人がいたら「どうしたんですか。」と声をかけたいと思います。ぼくができることは小さいことかもしれませんが、地いきのしあわせのためにできることをがんばって、やくにたてるようになりたいです。

みなさんごみをポイ捨てしていませんか。自分では、何とも思っていないかもしれませんが、何とも思っていないことでも、そのことによつて傷ついているものもあります。

僕が通っている中学校では、毎年六月に、国道清掃を行います。この活動は四十七年間、先輩方はずっと続けてきた活動です。去年までは中学生だけで行っていましたが、今年は同じ校舎で生活する小学生もいっしょにやりました。

一年生の頃から、国道清掃をやっていて、毎年少しずつではありますが、ごみの量が減ってきています。減ってきているのは事実ですが、やはり、まだ大量のごみが捨ててあり、自分としては、あまり減っているという実感がわきません。

中でも多いと感じるのは、タバコの吸いがらや、ペットボトル、ごみ袋などです。タバコの吸いがらが捨ててあるのは、海岸や人家の近くなどです。このことから、唐丹の町の人で、タバコを吸っている人が捨てていると考えられます。ペットボトルは、国道沿いや道路沿いに多くありました。このことから、車、自転車、国道を歩く人など、地元住民だけでなく、国道を通る人たちも、ペットボトルなどを捨てているのではないかと思えます。ごみ袋は、海辺に落ちていたり、海にうかんでいたりとすることが多くあります。学校の行事としてなんとなくごみを拾うのではなく、原因やどういふところで多く捨ててあるかなどを考えながらごみ拾いをするこゝとでより国道清掃の大切さを知りました。

そして僕が特に気になったのは、海に浮いているごみの影響です。今年七月釜石で研究している東京大学の方たちが学校へ来て、海のことをいろいろと教えて下さいました。その中に、うみがめの話がありました。なんと、うみがめはクラゲとまちがえて、ごみ袋を食べてしまうということです。うみがめはえさとして、クラゲを食べます。そしてそのクラゲと似ているのがごみ袋です。そのため誤ってごみ袋を食べてしまうのです。人間が、何とも思わず、ごみを捨ててしまうだけで、数多くの生き物が被害に遭っています。しかもその多くが、海や川などに住む生き物たちです。

毎年、国道清掃では、全部で約四十キロ程のごみを拾っています。この四十キロのごみがなくなるだけで、どれ程多くの生き物の命を救えるかと考えると、とても数えきれません。しかもこれは唐丹の町の話。地球規模で考えると、唐丹の何万倍という数の生き物を救えるでしょう。

今、テレビや教科書にまでも、ごみの問題が取り上げられています。ごみ問題を解決するためには、まず、ごみのポイ捨てから解決していかねければなりません。そうすると、ごみ問題も自然と解決に向かうはずです。ポイ捨てをなくすには、ポイ捨てをする人たちを少なくしていく必要があります。生き物たちへの影響など、ごみをポイ捨てすることでおこる被害を伝えていくことで、ポイ捨ては少なくなってくるのではないのでしょうか。ポイ捨てをしていない人でも、ポイ捨てをしている人を見つけたら注意するなど、全員で協力して、ごみ問題を解決することが、今の地球にとって大切なのではないのでしょうか。

ぼくの祖父は去年の四月三日に亡くなりました。亡くなった場所はのぞみ病院でした。祖父はすでに右半身が麻痺していて話すこともできませんでした。僕は見舞いに行つて、祖父に「おじいちゃん早く治して一緒に遊ぼうね」と言いました。そうすると祖父はにっこりしました。祖父は肺がんでした。享年七十歳でした。

祖父は、元気だったころコックをやっていました。また、屋根瓦を直す仕事をしていました。震災のころはあっちこっちに行つて直していました。祖父は優しい人でした。僕と野球やサッカー、ゲームなどをして遊んでくれました。また、チャーハンやラーメンやカレーを作ってくれました。おいしくてとてもうれしくなりました。僕は優しい祖父のことが大好きでした。今でも思い出すことがあります。

さて、僕は大平中学校のソーラン実行委員のメンバーです。僕たちはボランティア活動でソーランを地域で発表することがよくあります。その時に、老人施設「あいぜんの里」でも発表します。たくさんのお年寄りが、僕たちに、拍手を送ってくれます。中には一緒に踊りだす人もいます。そんな時僕は、うれしい気持ちになります。ソーランを発表してよかったとしみじみ思います。

しかし、僕は少し残念に思うこともあります。自分の祖父には僕の踊りを見せてあげられなかったことです。生きていれば見せてあげたかったです。だから僕は老人施設で踊る時に「この中に自分のおじいちゃんもいるんだ。僕の踊りを見てくれるんだ。」と思いながら踊っています。たくさん笑顔の中に、僕はいつでも祖父の姿をさがします。踊るたびに祖父の笑顔を思いうかべます。

しかし、僕は考えてることがあります。僕の祖父は、死ぬ時僕のおばと祖母に見とられて亡くなりました。家族に見とられて死んだ祖父は、幸せだったと思います。

しかし、世の中には「高齢者の虐待」といういやな言葉があります。僕はこの言葉が気になっていたのでインターネットで調べてみました。そして、家庭、あるいは養介護施設において、高齢者が虐待を受けるといふ現実もあり大きな問題となつてることを知りました。厚生労働省の調査結果によると養介護施設、事業者で最も多かったのは介護職の八十・六パーセントだそうです。僕は施設の中で虐待が起きているという現実には直視し悲しい気持ちになりました。なぜ罪のない老人を虐待しなくてはいけないのでしょうか。

次に僕は、法律について調べてみました。高齢者に対する身体的・心理的虐待、介護や世話の放棄・放任等が、家庭や介護施設などを防止するための法律が平成十七年十一月一日に国会において可決、成立しました。僕はこの法律に目を通してみました。僕がなるほどと思ったのは、「高齢者虐待の防止に向けた基本的視点のところ」です。「発生予防から虐待を受けた高齢者の生活の安定までの継続的な支援」「虐待を未然に防ぐための積極的なアプローチ」「関係機関の連携・協力によるチーム対応」のところを読み、このようなすばらしい支援で虐待を減らした方がいいと思いました。まだまだ虐待の問題は続いていくと思います。早くなくなればいいと心から願っています。お年寄りは夕飯を食べたことを忘れます。今はいつ？ここはどこ？様々な判断ができません。なりたくてこういうふうになるわけではありません。僕たちは、助けてあげたり、お世話をしあげなくてはなりません。僕たち中学生も、もっと虐待のことについて調べて考えていきたいです。